冊となっているが、すべて蓬左本と同じである。さらに同文庫には『医心方抄』一冊がある。これは廿巻の抄録で全一冊である。村上文庫創立者の刈谷藩医村上承卿が、天保十一年三月に筆写したものであり、これから考えて『医心方』廿巻も、その同年頃に村上承卿が筆写させたものと思う。

三、西尾市立図書館岩瀬文庫内にある半井家蔵書目録のなかに、『医心方』廿巻の他に、『医心方』の古写本五冊があったことが記してある。これは承安二年（一一七二）四月七日に書写し、文治五年（一一八九）十一月十日に文書博士敦光朝臣本を以て点訓したと記してある。しかしこれは記録のみで、現本は存在しない。

（京都市）

中国医学と道教（Ⅳ　善書について）

吉　元　昭　治

演者は本学会総会において、中国医学と道教との関係につき発表してきた。道教が、殊に明末清初の頃より儒教、仏教と混淆し、三教合一のかたちとなり、今日では民間信仰のかたちをとって、台湾および東南アジア華僑社会に生き、彼等の日常生活の指針ともなっている。一方、道教医学は、中国伝統医学をその側面とし、巫術的な面を残しながら、現在では民間療法の姿となって、民間信仰の具現性に力をかしている。

今回は前回の薬籤につづいて、善書をとりあげてみたい。

善書とは、酒井忠夫氏によれば、「善書とは観善の書という意味で、宋代以後一般に用いられた。観善を説く書であるから、販売のために刊行されるものではなく、無償で人に施与されることが多かった。この観善とは単に儒教の

経典の中で説かれる道徳の実践を勧めるという意味ではなく、民衆にも受け入れられるような通俗的な意味で用いられている。民衆にとって行い難いような複雑な制約をもつものではなく、『凡民』『愚夫愚婦』にも行いうる善であった。従って善書とは勧善懲悪のために民衆懲悪のために民衆道徳及びそれに関連する事例、説話を説いた民間流通の通俗書である」とされているからこの善書の輪郭がわかる。まさに「諸悪莫作、修善奉行」の倫理的基盤がある。歴史的には南宋の、太上咸応篇、明清時代の功過格、陰隲文、覚世真経などが名高く、大正十二年発行の『道教聖典』のなかには、これらとともに、抱朴子が収められている。

現在、台湾の寺廟では、これら善書の流れをくんで、数多くの善書が並べられ、いわゆる免費といって無料で配布している。またこれを十冊とか、百冊とかの費用を出したり、自家出版して寄付することが善行としてすすめられている。

現行、台湾の善書について記述されているものに、蔡懋棠氏の『台湾現行的善書』というのがある。この中で、台湾で流通している善書は約七八百種にのぼるが、氏でもさえ、このうちの百十種類余りしか集めていないといっている。そして八十五種あまりの善書について解説している。このうちの第七十番目に、前回本学会で発表した薬籤に関する書物である「博済仙方（呂帝仙方）」が、善書の一つとして記載されている。

最近の台湾及び東南アジアの民間信仰は三教合一から、回教、キリスト教を加えた五教を基本におくものから、羅教、理教、徳教、慈教等の新興的宗教も数多く、これらも布教手段として善書の発行については熱心である。しかし、これら流派の内容をみると、やはり中国人固有の宗教である道教の要素が最も大きいようである。

今回は演者は、この数年間台湾各地で得た善書のうちから、医学的善書ともいうべきものを選んで発表する。これらは、

①華陀菓菜秘方、附観音治病秘方、用手運動
②華陀仙翁秘方、菓菜療病法
③天地精華秘方
④中国伝出中薬秘方

⑤調経種子良方

等である。

このうち、①、②は一冊本、他はB4判一枚に印刷してある。①、②とも見開き二頁でB5判、①は一八〇頁、②は一六九頁よりなり、表題は似ているが内容は異なる。これらは、善書でもあり、民間療法がその内容となっている。人々は寺廟に参り、祈願して、これら善書内容の治療指針によって治療する。その人々も多く、そのためにこれら善書が処々の寺廟に収められているということは、台湾の民間療法が一つには宗教的色彩が強いこと、これによって日常の治療のよりどころとしていることがわかる。現に演者に、この書にもられた内容が真実であり、現に行っていて、演者にもすすめた人も二、三にとどまらず、その人達の教育程度も高いものであった。

発表では、これら医学的善書にもられた内容にもふれたい。なお、医食同源の色彩の強い、「全省素食処簡介」も追加する。

（小平市）

『外台秘要方』による古医籍輯佚の検討

小曾戸　洋

失われた六朝・隋唐の医籍輯佚に『外台秘要方』（宋版に限る）が第一級資料となることはここに述べるまでもない。量的にもさることながら、出典の巻次まで明示してあるからである。その引用文の表記法は原則として「〇〇方療……。××方同。出第△△巻中」というもので、これは「〇〇方という医書に『……』と記されている。××方にも同様の記述がある。〇〇方の第△△巻中に出てくる」という意である。したがって〇〇方の記載を『外台』中より抽出し、△△の巻数によって順次配列復原すれば、〇〇方がどこにどのような内容の記された医書であったかを窺い知ることができる。加えるに、他の条文末尾に「〇〇方同」とある条文を抽出し、さらに『医心方』『証類本草』などの引用本を総合検討し、その巻次を推定して配置すれば、